

東海道の道しるべ

進むべき先を示す道しるべ。かつて東海道一の宿場町だった熱田には、数えきれないほど多くの人に行き先を示してきた道しるべがある。東海道唯一の海路を進むのか、それとも陸路を進むのか、その分かれ道を示す道標だ。現在、その役割を終えた道標は、熱田神宮から南へ数百メートル進んだ先。伝馬町の一角にその姿を残している。



伝馬町にある道標。現在は場所を移されている。彫られた文字は薄れて読みにくい。

◎ 様々な道しるべ

道しるべと聞くと何を想像するだろうか。道案内の立札、登山道のペンキの矢印、北極星、偉人の言葉や社訓を挙げる人もいるかもしれない。令和3年度、東京や北京で開催されたオリンピックにもオリンピズムという道しるべがある。「スポーツを通して、体と心をきたえよう、世界のいろんな国の人と交流しよう、そして平和な社会を築いていこう」というオリンピズムの下、世界中のスポーツマンが力比べをするのがオリンピックだ。私たちは、日々、様々な道しるべを頼りに進む道を決めている。

◎ 交通の要所「宮宿」

熱田にある東海道の道標も、道しるべとして人々に道を示してきた。江戸時代、徳川幕府の五街道整備により東海道が誕生したが、同時に制定された宿場町は「宿」と呼ばれ、日本

橋（東京）から三条大橋（京都）間に 53 宿が整備された。熱田にあった第 41 番目の宿「宮宿」は旅籠の数が最も多く、街道一のにぎわいを見せていた。交通の要所だった「宮宿」には東海道と佐屋路・美濃路などを分岐する三叉路があり、そこに設置された道標は重要な道しるべだった。



江戸時代の三叉路の様子を描いたもの。中央右下あたりに道標が描かれている。
(尾張名所図会 なごやのまち今昔「源太夫社」：名古屋都市センター所蔵)

◎ 三叉路の行く先

北、南、東に分かれる三叉路はどこへ繋がっていたのか。道標に彫られた文字を読んでみると、まず、北側の側面には『南 京いせ七里の渡し 是より 北あつた御本社式丁道』とある。三叉路を南に行くと、伊勢へ向かう東海道唯一の海路「七里の渡し」に至ることがわかる。また、北へ2丁(約 218m)ほどの距離で熱田神宮となる。

次に、道標の東側には『北 さやつしま道 みのち海道』とある。これは、三叉路を北へ行くと佐屋路と美濃路に進めることを示している。このうち、佐屋路は「七里の渡し」の迂回路として有名だった。「七里の渡し」は、「宮宿」と「桑名宿」をつなぐ重要な海路だったが、悪天候の場合や船旅を好まない人たちのために、もう一つのルートが用意されていた。それは、「宮宿」から陸路で「佐屋宿」へ歩き、そこから川舟で木曾川を3里下って「桑名宿」へ至るというルートだった。「七里の渡し」の舟上には逃げ道がなく、物捕りの不安などもあったため、佐屋路は婦人や子どもが多く利用したため、姫街道とも呼ばれた。

道標の西側には『東 江戸かいとう 北 なこやきそ道』と彫られている。東は東海道を江戸に向かうことがわかる。また、北へ向かうと五街道のひとつ中山道（木曾路）に繋がっていることもわかる。美濃路を通して中山道の「垂井宿」へ進むことになる。

以上をまとめると、道標が案内する三叉路の行く先は次のとおりとなる。

- 南：「七里の渡し」へ
- 東：東海道を江戸へ
- 北：200m で熱田神宮へ 迂回路の佐屋路へ 美濃路を通して中山道へ



七里の渡し跡。夜間航行禁止を知らせる「常夜灯」などが再建されている。

◎ 多くの思いを受け止めた道標

江戸時代、道標の前を通り過ぎて行った人のことを思い浮かべてみると、いろいろなことが想像できる。船に乗ってみたいという子どもをなだめて、姫街道を進もうとする母子。熱田神宮の参拝前に「宮宿」で腹ごしらえをしようとする男。探し人を追って、東海道と中山道のどちらへ行くべきか迷う旅人。この道標の前で、たくさんの人が様々な選択をしてきたはずだ。

コロナ禍により、誰もが将来に不安を感じる世の中となった。これからどうすればいいのか、何か道しるべはあるのか。少し立ち止まって考える機会として、熱田区伝馬町にある東海道の道標を訪れてみてはいかがだろうか。

(道標の位置)

地図の黄色い矢印のところに設置されています。



(参考)

史跡散策路 宮の渡しコースマップ

<https://www.city.nagoya.jp/atsuta/page/0000000588.html>

(※無断での画像の複製、転載、改変はお控えください)